

2014 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:15~14:15 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。
6. 設問文にある点数は、満点が100点となるような配点表示になっていますが、国文学専攻の配点は150点となります。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

わたし自身が、西洋人との感じ方の違いを痛感し、民族によって感じ方には微妙な違いのあることを直観し、日本人の感じ方を解明したい、と考えるようになった⁽¹⁾タンシヨは、花の好みの違いであった。

かつて三年間、毎年ひと月ほど、集中講義のため、オランダの美術大学に滞在したことがある。先方の学年暦と、日本の大学教師の日程表が、最もよく折り合えるのは、二月末から三月だった。最初の年、今年は花見はできないな、と思いつつ出かけた。

小さな大学だが、その構内には一本の大木があり、木肌は桜に似ていた。そう思って見ているうちに、蕾が色づき、ほころんで、やがて日本の時期よりは早く、満開の桜となった。同行の妻もわたしも、これに見とれて幸せだった。ところが、大学のスタッフも学生たちも、満開の桜に対して無関心⁽²⁾のようであった。この中庭に面して図書室があり、そこは全面ガラスで、陽光がいっぱい差し込むようになっていた。驚いたのは、そこで働いている司書の女性が、それを桜と知らないのはもとより、いま満開に咲き誇っている、という事実さえ気づいていなかったことである。花壇に植えられたバラやチューリップならば、無関心ではないはずである。関心があればこそ、そこかしこに花壇をつくり、これらの花を植える。

バラやチューリップは、一輪であっても、それとして観賞する対象になる。美貌^{びぼう}の女優やモデルに捧げられるありふれた形容として、「大輪のバラのよう⁽³⁾な」という言い方がある。日本の伝統のなかでは、芍薬^{しやくやく}や牡丹^{ぼたん}、百合^{ゆり}などがそれに相当する。これに対して、「あなたは桜の花のよう⁽⁴⁾だ」と言われたなら、女性はさぞかし戸惑うことであろう。美しいと言われているのかどうかさえ、定かではない。もちろん、桜の花は美しい。しかし、女性の美貌を形容するものではない。なぜなのか。桜の花は見つめるべき対象となるには小さく、その美しさは⁽⁴⁾グンセイの美だからである。花のトンネルは、この特質を見事に表現している。大輪のバラは見つめる対象だが、グンセイする桜はわれわれを包み込む。

この違いに注目するならば、バラと桜の対立は、実は見かけ以上に根の深い問題で、身体感覚や感性の違いに及ぶことが見えてくる。西洋の近代思想は、認識する「我」を中心に置き(主観)、この我が対象(客観)を捉える、という主観—客観の軸に

添って構成された。この基軸の意味は、主観が対象を支配することであって、その逆ではない。「我」が対象を受容するのではない。「我」がその対象を対象として成り立たせている、という考えである。主観が対象を構成するとともに、「対象」というあり方が、主観の存在を聖化する。そこで、主観Ⅱ人間は、対象Ⅱ世界の支配者となる。しかし、近年、この人間中心主義に対する批判と反省の意識はいよいよ強くなってきている。例えば、ドイツの哲学者ゲルノート・ベーメは、雰囲気というあり方に注目している。より正確に言うならば、ものあり方のなかの、対象的な側面よりも雰囲気的な側面に注目している。意識は対象を支配するが、雰囲気にはわれわれの方が包まれる。そのベーメ氏が強い関心を示したのが、桜のうたを素材として美の性格を論じた拙論である。

ここでの主題は美ではなく感性だが、焦点を変えつつ、同じうたを糸口として、議論を始めよう⁽⁶⁾。それは、よく知られた与謝野晶子の次のうたである。もちろん、ここでの注目点は、対象として立ち現れる花に対する、われを包むような花のあり方であり、それに応ずる感性である。対象に向かう意識が (7) であり、知性に傾斜するのに対して、花に包まれるとき、意識は拡散し、その美は (8) に、全身で感じ取られる。

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふみなうつくしき (8) (『みだれ髪』)

初出は一九〇一年五月で、この年の花の季節に詠まれたものと見られる。ここには幸福感がにじんでいる。ときに晶子は二二歳。前年に初めて逢った与謝野鉄幹に、この年の二月、粟田山で再会して結ばれた。その鉄幹を追って六月に上京し、八月には『みだれ髪』を出版、十月に結婚している。幸福感の謂れは明らかだ。このうたのとき、晶子が独りであることも疑いない。恋人連れならば、「こよひ逢ふ人」に意識を向けることはなかったろう。夜桜見物の人の波のなかに独りいて、おそらくは恋人の存在を確信しつつ、幸福感に酔っていた。

(9) にはシンプルなうたである。そこで佐藤春夫は、「桜月夜という造語だけがめずらしい」と言い、「文字通りの歌で、

駄作」と決めつけている。しかし、以下に示すように、このうたは他の作品には見られない感性のタイプを捉えている。その一事だけでも価値をみとめてしかるべきであり、これを駄作というのは偏った判断と言わなければなるまい。

ではこの作が結晶させている感性はいかなるものか。「うつくし」という形容詞に注目しよう。少なくとも『みだれ髪』の時期の晶子は、この語を好み多用している。そもそも「うが美しい」というようなストレートな表現は、教科書的な作文術では禁じ手に相違ない。それがどのように美しいかを読者に実感させてこそその表現であり、解答だけを記すのは、最も芸のない表現である。しかし、そのためか、このためらいのない表現には、却って大胆さが感じられる。しかもチセツな感じを与えないのは、なぜであろうか。それは、この直截な言い方が、美しさの独特の感じ方を伝えているからだ、と思われる。⁽¹¹⁾

例えば、「ゆあみする泉の底の小百合花」二十の夏をうつくしと見ぬ」(『みだれ髪』)を考えてみよう。明るい日差しの中かで湯船に横たわり、水を通して見える自らの肉体を美しいと言っているのだが、その感嘆にナルシスト的な響きはキハクである。その対象が、「わたしのからだ」ではなく、「二十の夏」だからである。まるで自分のものでないかの⁽¹²⁾ように、その若さをほればれと見つめているのである。造形的な私たちのよさや色彩などの問題ではない。美しいのは、生命の充実である。次のうたには、同じ感覚が、しかもより鮮明に現れている。

梅の溪の霽くれなるの朝すがた山うつくしき我うつくしき
〔みだれ髪〕

鉄幹と結ばれ、幸福を経験した粟田山で詠まれたうたである。朝もやを通して紅梅の紅色が霞んで見えている景色は、確かに美しいだろう。しかし、このうたのうたっている断固たる美しさは、そのような風景のものではない。「我うつくしき」に注目しよう。「小百合花」の場合と異なり、ここでは「我」のすがたを見ているわけではない。全身を弾ませるような幸福感が、目の前の風景を肯定し、自らの存在を肯定しているのである。しかも歌人は、幸福だとうたっているわけではない。美しいと言っているのである。すなわち、自らの心理ではなく、自己を包む世界のあり方を感じているのである。美しいとは、存在の充実をみ

とめ、それを積極的に肯定する感覚である。この美の概念、その感じ方は、常識的なものではない。

「清水へ」のうたに戻ろう。このうたにおいて、このような美の感じ方は、一つの結晶を見せている。粟田山で晶子は幸福を体験した。しかし、桜月夜の彼女は、幸福のなかにいるだけである。このうたをキョシンに読めば、「こよひ逢ふ人」を「みなうつくし」くしているのは、桜月夜である。このとき、晶子が桜の花を見ていない、ということも重要である。その桜が名所である円山公園の桜であることは、明らかである。彼女の歩いている祇園に桜はない。桜の美は、桜の花にとどまることなく、周囲へと拡散し、人びとを包み込む⁽¹⁵⁾。そのことを、歌人は「桜月夜」という造語によって掬い取ったのである。美は、存在の充実によるものである以上、世界を美しくする。

このような美の捉え方は、おそらく西洋思想にはない。幸福が世界を美しく見せる、という思想ならば見つけられる。『生理学要綱』という著作のなかでデイドロは、《対象に対する感覚と、感覚に対する対象との相互作用》を語って、次のように言っている。「わたしが幸せだと、わたしをとりまくすべてのものは美しくなる。わたしが苦しんでいると、わたしを取りまくすべてのものは暗くなる」。ここでデイドロは、おそらく《わたしの心理状態》が対象の美の判断を左右する、という不安定さを覚えていいる。真の主題は自我の不安だ、⁽¹⁶⁾と言えよう。ところが、晶子の自我は、彼女がそのなかにある世界の充実に、言い換えればその世界の美に包み込まれている。バラが不安を誘うのに対して、桜は身体的にわたしを包む。

これは晶子の (17) な体験であり、他には見られない捉え方であろうか。ここで分析される感じ方は、多分に当の歌人の個性を映しているだろう。しかし、分析してそれを理解することができるということは、われわれもそれを体験しているということである。単なる読者であるわれわれにできないのは、それを形象化することであって、理解することではない。ポワローが言ったように、詩人の役割は、誰もが経験しつつ気づかずにいることを、初めてことばにするところにある。また、一つひとつが個性の表現であるとしても、それらを集合したところに見えてくる感性のあり方は、(18) な性格のものだと考えることもできる。現にここで参照したうたは、バラ型とは異なる桜型の感性の、古い存在を証言してくれるものである。

(佐々木健一『日本的感性』による)

〔問一〕 傍線(1)(4)(10)(12)(14)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)(3)(6)(13)(16)「よう」の語の文法的説明としてもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

ただし、同じものを繰り返し用いてもかまわない。

- A 意志をあらわす助動詞
- B 推量をあらわす助動詞
- C 勧誘をあらわす助動詞
- D たとえや比較をあらわす助動詞の一部
- E 推定をあらわす助動詞の一部

〔問三〕 空欄(7)(8)(9)(17)(18)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

- A 論理的
- B 対称的
- C 触覚的
- D 視覚的
- E 個性的
- F 技法的
- G 一般的

〔問四〕 傍線(5)「主観Ⅱ人間は、対象Ⅱ世界の支配者となる」とあるが、なぜそのように言えるのか。その理由としてもっとも

適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 西洋の近代思想においては、人間の主観によつてはじめて対象が構成されるので、主観としての人間がすべての支配者となると筆者は考えているから。

B 西洋の近代思想においては、人間は他の何ものにも先がけて創造されたものなので、人間によつて他のすべてが支配される関係になると筆者は考えているから。

C 西洋の近代思想においては、人間の認識が対象との主観―客観の関係を作ることによつて構築されるので、そのような認識を持つ人間が支配者となると筆者は考えているから。

D 西洋の近代思想においては、人間の主観が身体感覚や感性を反映して成立するものなので、そのような主観を持った人間がすべての支配者となると筆者は考えているから。

E 西洋の近代思想においては、外部に存在する対象をどのように認識するかは人間の主観次第なので、その人間がすべての支配者となると筆者は考えているから。

〔問五〕 傍線(1)「美しさの独特の感じ方を伝えている」とあるが、そのような「独特の感じ方」の内容を示している箇所を本文

中から二十五字以内で抜き出しなさい。(句読点なども一字に数えること)

〔問六〕 傍線(15)「そのことを、歌人は「桜月夜」という造語によって掬い取ったのである」の説明としてもっとも適当なものを

左の中から選び、符号で答えなさい。

A 歌人の体験した幸福が個人にとどまることなく周囲へと拡散し、人びとがその幸福感を継承しているという実感を持つようなその夜の状況を、「桜月夜」という造語を作りだすことによって表現した。

B 今歌人の目の前に桜の花がないにもかかわらず、その花の美しさの記憶が人びとに伝わることでその心を美しくするという特殊な状況を、歌人は「桜月夜」という造語によって普遍化することで表現した。

C 「こよひ逢ふ人」が「みなうつくし」と感じられるのは、満開の桜の美が人びとを包み込み、そこに歌人が生の充実感を感じているからであり、そのことを「桜月夜」という造語を用いることによって表現した。

D そこに桜があることで他のすべてのものの美しさがよりきわだって見えるという感覚は従来のうたの発想にはなかったため、歌人はその新しい感覚を「桜月夜」という造語を使用することによって表現した。

E 歌人がここで「みなうつくし」と感じられるのは、その夜に咲いている桜の美しさを見ている人びとが同じ感覚を共有できるからであり、そのことを「桜月夜」という造語を用いることによって表現した。

〔問七〕 次の文ア、オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア どのような花を美しいと意識するかという日常の出来事に注目することによって、民族による微妙な感じ方の違いを説明することができる。

イ 「雰囲気」というあり方が注目されたのは、それを考えることで、西洋的な人間中心主義を見直す契機になると思われたからである。

ウ 「美しい」とだけ記すのはあまり芸がない表現だが、晶子のうたはあえてそれをおこなうことで、表現に素朴な味わいを加えようとしている。

エ 西洋の近代思想には、自我が外部の世界のあり方を決定するという考えがあるが、自我が美に包み込まれるという捉え方はない。

オ うたを分析して理解できることはそれを経験しているということだが、本当に個性的な表現は多くの人びとの理解を超えたところに成り立っている。

二 次の文章はふたつの小話からなる『大和物語』の一章段である。これを読んで、後の間に答えなさい。(30点)

泉の大将、故左のおほいどのにまうでたまへりけり。ほかにて酒などまゐり、酔ひて、夜いたくふけて、ゆくりもなくものしたまへり。大臣おどろきたまひて、「いづくにもものしたまへるたよりにかあらむ」など聞こえたまひて、御格子あげさわぐに、壬生忠岑、御ともにあり。御階のもとに、松ともしながらひざまづきて、御消息申す。

かささぎのわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ
となむのたまふと申す。あるじの大臣、いとあはれにをかしとおほして、その夜、夜ひと夜、大御酒まゐり、遊びたまひて、大將も物かづき、忠岑も禄たまはりなどしけり。

この忠岑がむすめありと聞きて、ある人なむ得むといひけるを、いとよきことなりといひけり。男のもとより、「かの頼めたまひしこと、このごろのほどにとなむ思ふ」といへりける返りごとに、
わが宿のひとむらすすきうらわかみむすび時にはまだしかりけり
となむよみたりける。まことにまだいとちひさきむすめになむありける。

〔大和物語〕による

注 泉の大将……藤原定国。 故左のおほいどの……藤原時平。 壬生忠岑……定国の隨身。

御階……寝殿から庭におりるための階段。 かささぎのわたせる橋……七夕の夜、織女星と牽牛星を逢わせるため、

かささぎが翼を並べて天の川に渡す橋。 転じて貴人の邸宅の階段をいう。

〔問一〕 傍線(1)(4)(6)の語句の解釈として、もつとも適当なものをそれぞれ左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「ゆくりもなくものしたまへり」

- A 土産みやげも持たずに押しかけなされた
- B 偶然に前を通りかかられた
- C 人目を忍んでいらつしやった
- D 突然おいでになった

(4) 「御消息申す」

- A お手紙をお書きになる
- B ごあいさつを申し上げる
- C 近況をお知らせする
- D お尋ねなされる

(6) 「物かづき」

- A 褒美を与え
- B 引き出物をたまわり
- C 衣服を頭にかぶって遊び
- D 酔って酒を頭からかぶり

〔問二〕 傍線(2)「いづくにもものしたまへるたよりにかあらむ」という問に対する返答に当たる部分を、本文中から十字以内で抜き出しなさい。(句読点は一字に数えない)

〔問三〕 傍線(3)「聞こえたまひ」を説明した次の文の空欄に入れる語として、もっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

「聞こえ」は に対する 、「たまひ」は に対する 。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|----------|---|------|---|--------|---|-----|
| A | 泉の大将 | B | 故左のおほいどの | C | 壬生忠岑 | D | 忠岑がむすめ | E | ある人 |
| F | 語り手 | G | 尊敬語 | H | 謙讓語 | I | 丁寧語 | | |

〔問四〕 傍線(5)「のたまふと申す」の「ア」「のたまふ」「イ」「申す」は、それぞれ誰の行為か。もっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|----------|---|------|---|--------|---|-----|
| A | 泉の大将 | B | 故左のおほいどの | C | 壬生忠岑 | D | 忠岑がむすめ | E | ある人 |
| F | 語り手 | | | | | | | | |

〔問五〕 傍線(7)「かの頼めたまひしこと」が指している部分を、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。(句読点は一字に数えない)

〔問六〕 次の文ア～エのうち、傍線(8)の和歌についての説明として正しいものにはA、正しくないものにはBの符号で答えなさい。

- ア 「ひとむらすすき」は一群のすすきの意味で、忠岑のむすめが何人かいることを暗喩している。
- イ 「うらわかみ」の「み」は、理由の意味を表す語である。
- ウ 「すすき」を「むすぶ」は、すすきを草枕に結んで寝ることで、結婚を暗喩している。
- エ 「まだしかりけり」は、末むすめの結婚は拒否するという意味である。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)(20点)

(1) 或^レ問^フ、三年之喪不^ニ三十六箇月^{ナラ}、止^ニ於^テ二十五日^ニ而畢^セ何^ヤ也。曰^ク、喪者親

始^メ死^{スル}之日也。十三日^ハ再見^ル親死之日^ヲ也。謂^ニ之^ヲ小祥^ト。尚^{ナホ}在^リ吉凶之界^ニ。二

十五日^ハ見^ル親死之日^ニ矣。謂^ニ之^ヲ大祥^ト。言^フ祥莫大乎是。始^メ棄^テ凶而從^フ

吉^ニ矣。是月也。有^リ余哀焉。心怛^{ダツ}怛^{ダツ}而不忍^ビ。情恋^ト恋^ト以^テ增^ス悲^シ。又一月^ニ而為^シ

中^ト月^ト、乃^チ行^フ禫^タ祭^ヲ。禫者澹^タ澹^タ然^ト平安^{ナリ}矣。作^シ樂^シ歎^ス笑^ス如^シ他日^ノ然^リ、飲^ム酒^ヲ食^ム肉^ヲ

如^シ衆人然^リ。蓋^シ自^レ二十五日^ニ已^ム属^シ余哀^ニ、二十六日^ニ已^ム無^シ余哀^ニ。先王制^ス

礼^ヲ、雖^モ聖人^ト不^レ敢^ヘ過^ギ也。近世迂儒^ニ有^リ執^ル喪三十六箇月^ヲ者^上。是^レ不^レ明^ラ喪^ニ之

一字^ヲ也。

(呂坤「三年之喪弁」)

注 祥……父母の死後に行う祭祀。

怛怛……悲しむさま。

中月……中一か月。

禫祭……服喪を終えた後で行う祭祀。

澹澹然……心静かなさま。

他日……以前。

先王……古の君主。

迂儒……あさはかな学者。

〔問一〕 傍線(1)「或」および傍線(4)「乃」の読みとしてもつとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

傍線(1)「或」 A あるひと B しかからば C あるとき D もしくは E あること

傍線(4)「乃」 A よく B ために C すなはち D つひに E しばらく

〔問二〕 空欄(2)に入る文字としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 半 B 一 C 二 D 三 E 四

〔問三〕 傍線(3)「言祥莫大乎是」は「しやうこれよりだいなるはなきをいふ」と読む。これに従って、解答欄の原文に返り点を

付けなさい。(返り点以外に何も書かないこと)

〔問四〕 傍線(5)「飲酒食肉如衆人然。」の解釈としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人々を招き大いに酒を飲んだり肉を食べたりする。

B 人々と同じように酒を飲んだり肉を食べたりする。

C 人々は酒を飲んだり肉を食べたりするようになる。

D 酒を飲み肉を食べるようでは人々と変わりがない。

E 酒を飲み肉を食べる点においては人々に及ばない。

〔問五〕 本文の内容に合致するものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 服喪期間の長さは、古い習慣に過ぎないので、今の人々にとっては調整が必要であると考えられる。
- B 服喪期間が明けても、迂儒のような人々は、残っている悲しみに執着する傾向があると考えられる。
- C 服喪期間の長さは、その間の祭祀のありかたや人の感情の変化などから決まっていると考えられる。
- D 服喪期間であっても、心静かに過ごさなければ、人はいつも通りに生活してかまわないと考えられる。
- E 服喪期間の長さは、古の君主が、人々に対する最低限の要求を制度化したものであると考えられる。